

名其地曰不實柿ミナラガキ兒到其處問此地何號人答以其名時餘樹有果兒曰見今何有實乎

〔梅園日記〕柿木文字

白石先生の記にかこみ一尺餘も有つらん木の半よりさけし所に、おのづから天下の字有を、人の見せたるに、是は柿にやといひしかば、かの人驚きて、いかに知給ひぬらん、是はある寺なる澀柿を切て、薪にせんとて割しに、此文字のあらはれしかば、めでたき物なりとて薪にせて京より來りし也といふ、柿木にはかゝる事有よしを、ふるき書どもに、ゑるし置侍るとあり、按ずるにふるき書とは、今物語に、ひえの山よかはに住ける僧のもとに、小法師の有けるが、坊の前に柿の木有けるを、切てたかんとて、いちのきれをわりたりける中に、くろみの有けるが、文字に似たりけるを、あやしと思ひて、坊主に見せたりければ、南無阿彌陀佛と云文字にて有ける、ふしぎなどいふばかりなし、沙石集に、蓮養房といふ山寺法師、前栽に柿の木を植て、年來愛しけるが、他界の後弟子の僧、此木を切て湯木にせんとてわりて見るに、文字の勢二寸ばかりにて、蓮養房と文字あり、黒木の如くして、木の中にわれども、一體にて有けり、谷響集に、客云、拆木中有文字、嘗於勸修寺八幡神祠親見矣、或謂多是柿木也、中略物理小識に、柿木畫皮生文、など見えたるをやいはれつらん、又いと近きは、友なる本間眠雲游清が鶉鴉集に、文化十一年甲戌の春、伊豫國大洲領宇和川村に、がらくといふ處あり、畑中に大なる柿木有て、作物の障になれば、畑主其柿木を伐て、本の所を斧にて二ツに割たるに、文字あり、太王左月右旁は不分文字は濃藍の色にて、墨もて縁を雙鉤したるが如し云々とあり、又按ずるに、柿ならぬ他の木にも書畫ありし事、和漢の書に出たり、

〔玉勝間〕柿の本 栗の本

二條良基公のさよのねざめといふ物に、いはく、後鳥羽院の御代には、よき連歌の上手をば柿の